

## 保育現場における保護者の気づきの質に関する研究

- 保育参加及び保育参観後の自己分析から -

Study on the quality of awareness among guardians at childcare centers

- Self-analysis after participation in childcare and classroom visits -

隣谷 正範\*<sup>1</sup> (Masanori TONARIYA) 大谷 誠英\*<sup>2</sup> (Nobuhide OHTANI)  
 川上 ゆかり\*<sup>3</sup> (Yukari KAWAKAMI) 牧田 和美\*<sup>4</sup> (Kazumi MAKITA)  
 丸山 博美\*<sup>4</sup> (Hiromi MARUYAMA) 黒江 美幸\*<sup>4</sup> (Miyuki KUROE)  
 美谷島 いく子\*<sup>5</sup> (Ikuko BIYAJIMA)

\*1 松本短期大学 \*2 上田女子短期大学 \*3 認定こども園 慈光幼稚園 \*4 松本青い鳥幼稚園 \*5 東京家政学院大学

## 【 Abstract 】

This study focused on the awareness of guardians during participation in childcare and classroom visits at childcare centers. Through extraction and analysis of data on awareness, the characteristics of each activity were identified. Study 1 used a questionnaire prepared from the results of a pilot study to investigate if the guardian's awareness was affected by the child's gender, age, or presence/absence of siblings. Study 2 focused on awareness during participation in childcare at X kindergarten and classroom visits at Z kindergarten. Based on the characteristics identified from free descriptions, etc., the nature of awareness obtained from those activities was summarized.

Study 1 indicated that both gender and the presence/absence of siblings influenced the awareness of guardians. Study 2 employed the KH Coder research method and key words were identified from the original descriptions. It showed that the awareness of guardians was highly comparable during both activities and a certain level of homogeneity was identified.

【 Key words 】 Childcare activities , children's behavior , guardian's awareness

## 背 景

幼稚園における子育て支援に関しては、「少子化と教育について（報告）」（中央教育審議会 2000 年）を受けて、「幼児教育振興プログラム」（文部科学省 2001 年）において、地域の幼児教育のセンターとしての子育て支援機能や「親と子の育ちの場」としての役割や機能を進めることが示されている<sup>1)</sup>。

幼稚園教育の指標となる幼稚園教育要領には、保護者対応に関する具体的な記述は見受けられないが、「幼稚園の目的の達成に資するため」に「家庭や@地域における幼児期の教育の支援に努める」<sup>2)</sup>との努力義務が示されている。また、「教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項」の項目には「家庭との緊密な連携を図るよう」にすることのほか、「保護者が、幼稚園と共に幼児を育てるという意識が高まるようにする」<sup>3)</sup>支援を行うことが記されており、家庭との連携を行うに

あたっては「保護者と幼児との活動の機会を設けたりなどすることを通じて、保護者の幼児期の教育に関する理解が深まるよう配慮する」<sup>4)</sup>とされている。この方法のひとつに“保育参加等の保護者支援”が含まれるものと理解できる。

そのような中、「平成 26 年度幼児教育実態調査」によると、子育て支援実施園のうち、保護者の保育参加を行っているのは、公立 76.7%、私立 59.5%、合計 65.8%であり、私立園ほど実施率が低い結果がある。なお、1 園あたりの年間平均実施日数は、公立 9.4 日、私立 11.7 日、全体 10.7 日である<sup>5)</sup>。

大森ら（2004）がいうように、保育参加は親が成長していくために有効<sup>6)</sup>であるとの主張が多く、島津（2014）は「『保育参加』の実践は、『支援者』『被支援者』の枠組みを脱構築した、保護者と保育者の学び合いや共感から子どもを『共に育てる』という認識の生成へと繋がる取り組みとして捉えることができ」、「日常の保育のなかに保護者が含まれることで、子ども・保育者・保護者が共に自然体でふ

るまい、生活としての保育の経験の共有のみならず、相手の行動やその背後にある価値観や認識を認め合うための時間と空間の共有が可能になる」<sup>7)</sup> 手段・方法であることを述べている。

一方で、保育参観は、研究自体が蓄積されてきているとは言い難く、国立情報学研究所が提供するCiNii (NII 学術情報ナビゲータ) を用いた検索<sup>(1)</sup>において、①「国内での実践を対象とした研究」であり、かつ②「保護者を対象にその効果に注目した研究」は学会報告及び雑誌記事、各1件にとどまる。その中でも、前者の学会報告を行った高原(1995)は、「失敗・挫折は、保育集団の成長につながり、より高度な資質の高めあいが出来た」ことや「保護者の中にも、他園との比較で『見るための行事』を要求されることもあったが、『子どもにとって何が大切か』を知らせ理解を得た」こと<sup>8)</sup>を報告している。

### 本研究の目的

以上を踏まえて、本研究では、これまでの研究では十分に整理・分析されてこなかった保育参観も含めて、保護者の学びの視点から保護者への保育参加及び保育参観の意義について整理する。これらの成果を産出することによって、年中行事として企画されるさまざま場面・機会への保護者参加の必要性についての示唆が得られるものと推察する。

最終的な到達点として、本研究では、保育現場で行われた保育参加及び保育参観での保護者の気付きに着目し、気付きを抽出・分析する中から各々の活動の特徴を見出すことを目的とする。研究1では、予備調査<sup>(2)</sup>を基に作成した質問紙を用いて、保護者の気付きに子どもの性差・年齢・きょうだいの有無が与える影響を検討する。研究2では、X幼稚園の保育参加とY幼稚園の保育参観における保護者の気付きに着目し、自由記述等から見出される特徴を基に、両活動から得られる気付きの性格について整理することを目的とする。

なお、保育参加及び保育参観の運用や活動内容等の実態はさまざまであるが、本研究では便宜上、保育参加を「保護者が保育者の一人として保育に参加することを目指して企画された諸活動」、保育参観を「幼稚園での子どもの生活を知ることを目指して企画された観察を主とする諸活動」と定義する。

## 研究 1

### 目的

「親と子の育ちの場」等を幼児教育の場で具現化したものとして、子どもと保護者が共にその場を構成する保育参加及び保育参観がある。一般的に、保育参加は子どもとの遊びや活動を“保護者が共に体験・経験する場である”のに対して、保育参観は、“保護者に保育場を眺めてもらう機会である”という点に最も大きな違いを見出せる。しかし、そのいずれの活動においても、保護者は実際の園での生活に触れ、家庭とは異なる環境下での子どもの様子や子どもの世界を知ることができるといった共通の特長を持つものであることにほかならない。

そして、保育参加及び保育参観を保護者の気付きの側面から捉えることは、幼稚園で行われる家庭を巻き込んだ諸活動が、保護者の養育力の向上に繋がっていることを立証する観点からも重要であると考える。そこで、まず研究1では、保育参加及び保育参観各々に参加した保護者の気付きについて、子どもの性別・年齢・きょうだいの有無による影響を検討することを目的とした。

### 方法

#### [調査時期]

保育参加は2013年6月3日～10月11日の期間中に各学年複数回、保育参観は同年11月11日～11月13日の期間中に各学年それぞれ1回実施し、無記名式の質問紙を保育参加及び保育参観の活動後(最終日)に配布した。活動の内容は、表1に示す通りである。

#### [調査対象者]

N県M市の私立幼稚園Xにおいて実施した保育参加及び保育参観の活動に出席した年少・年中・年長クラスの保護者を調査対象者とした(両活動の調査母体は同じ)。回収した用紙中の欠損項目等を考慮した結果、保育参加174名、保育参観160名の計334名分を有効回答とした。

#### [調査手続き (倫理的配慮を含む)]

各回ともに、当該クラスの教諭が保護者に調査用紙を配布し、調査の概要、目的、不利益の発生防止、個人情報保護の具体的な手順・責任の所在に関する説明を口頭にて行い、回答を依頼した。調査は無記名式で実施し、調査用紙の提出をもって研究参加に同意を得られたことを説明した上で後日登園時等に回収した。また、回収時に回答内容が見えないように保護者には封筒を配布し、回収期限後に一斉に開封することで匿名性を確保した。

表1 保育参加及び保育参観の内容・時期

	年少		年中		年長	
保育参加	10月9, 10, 11日	泥団子作り・砂遊び・イナゴ取り等	6月3, 4, 5日	土山泥遊び・色水遊び・イナゴ取り等	7月17, 22, 23日	じゃが芋掘り・泥団子作り・積木でタワー作り等
保育参観	11月11日	ごっこ遊びの準備	11月12日	クリスマスツリーの制作	11月13日	ダイナミックな段ボール製作

表2 保護者の視点から捉えたX幼稚園での保育参加及び保育参観における気付き

【保育参加】

	子どもの個性に気付けた	育ち合いの姿が見られた		友人関係中での育ちの促し			
		肯定回答数	p値	肯定回答数	p値	肯定回答数	p値
性別	男児	79 (92.9)	n.s.	27 (31.8)	*	66 (77.6)	*
	女児	79 (88.8)		43 (48.3)		55 (61.8)	
年齢	3歳	29 (87.8)		13 (39.4)		19 (57.6)	
	4歳	60 (90.9)	n.s.	26 (39.4)	n.s.	50 (75.8)	n.s.
	5歳	50 (90.9)		23 (41.8)		38 (69.1)	
	6歳	19 (95.0)		8 (40.0)		14 (70.0)	
きょうだい	有り	119 (89.5)	n.s.	54 (40.6)	n.s.	94 (70.7)	n.s.
	無し	39 (95.1)		16 (39.0)		27 (58.5)	

【保育参観】

	子どもの個性に気付けた	育ち合いの姿が見られた		友人関係中での育ちの促し			
		肯定回答数	p値	肯定回答数	p値	肯定回答数	p値
性別	男児	71 (97.3)	*	14 (19.2)	n.s.	44 (50.6)	*
	女児	76 (87.4)		18 (20.7)		50 (68.5)	
年齢	3歳	24 (96.0)		4 (16.0)		11 (44.0)	
	4歳	52 (88.1)	n.s.	11 (18.6)	n.s.	33 (55.9)	n.s.
	5歳	48 (98.0)		9 (19.6)		32 (65.3)	
	6歳	23 (85.2)		8 (29.7)		18 (66.7)	
きょうだい	有り	120 (90.9)	n.s.	26 (19.7)	n.s.	99 (75.0)	*
	無し	27 (96.4)		6 (21.4)		14 (50.0)	

n (%) n.s.: not significant \* : p < 0.05

【調査項目】

分析に用いた調査項目は、①基本属性（性別、子どもの年齢、きょうだいの有無）、②活動に伴う気付き（「子どもの個性の違いを感じた場面」「育ち合いの姿が見られた場面」「友人関係中で育ちが促されたと感じた場面」）の有無、そう感じた理由（以下、自由記述）である。

量的データは表計算ソフト Excel を用いてデータをセットし、Statcel3 を使用して集計を行った。自由記述データの分析には、計量テキスト分析システム KH Coder Ver. 2.00f を使用した。分析に用いた KH Coder の品詞体系<sup>(3)</sup>は、名詞（漢字を含む2文字以上の語）、名詞 B（平仮名みの語）、名詞 C（漢字の語）、サ変名詞、形容詞、形容動詞、ナイ形容、副詞可能、未知語、動詞（漢字を含む語）、動詞 B（平仮名みの語）、否定助動詞、形容詞、形容詞 B、副詞、副詞 B である。また、特徴が見られた集合体に対しては関連語検索を行い、共起ネットワーク（出現パターンの似通った共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク）を描いて中心語と他の語との結びつきを捉えた。

結果及び考察

表2に示す分析結果（肯定回答数）のうち、子どもの性別に目を向けると、【質問】「子どもの個性に気付けた場面があった」では、保育参観において女児群に比べて男児群ほど有意に高く（p < 0.05）、【質問】「育ち合いの姿が見られた場面があった」では、保育参加の女児群ほど有意に高い結果であった

(p < 0.05)。次に、【質問】「友人関係中での育ちが促されたと感じた場面があった」に目を向けると、保育参加の性別では男児群ほど有意に高く（p < 0.05）、保育参観の性別では女児群ほど有意に高い結果が得られた（p < 0.05）。また、きょうだいの有無との関係においては、きょうだい有りの群ほど有意に高い結果であった（p < 0.05）。

結果の中では性差によるものがあるが、これは活動内容等から推察すると、男女間の遊び方自体や展開の違い、動き等から保護者が感じ取る部分が多かったことが要因としてあるものと考えられる。そして、最も特長的なのは、【質問】「友人関係中での育ちが促されたと感じた場面があった」において、保育参観では「きょうだいの有無」により有意な差が見られたが、保育参加では見られなかった点である。仮説の域を出ないが、保育参観では、保護者の参加がなく、遊びの質的变化をもたらして子どもへの影響が生じた可能性が低いことが前提にあるとすれば、“きょうだい”がいる者ほど育ちの促しを日常的に目にしているからこそ、友人関係の間での気づきを得やすい面があるものと推察する。しかしながら、“きょうだいがいない”からといって友人関係中での育ちに気付いていないわけではない。両活動ともに半数以上の保護者がその点に気付いていたことは、見方を変えればむしろ高い割合であるとも捉えられる。この点については、詳細に評価を行い、その姿の実体を精査していく必要がある項目と思われる。

次に、研究結果の背景要因を探るために有意な差



が見られた群及び質問項目を取り上げ、「はい」と回答した者の「そう感じた理由」の自由記述を取り出してKH Coderの共起ネットワークで捉えた。その結果、保育参加の「育ち合いの姿が見られたと感じた理由」では自由記述の原文（以下同じ）で年齢差を表していた「年中」「憧れる」のキーワードが、「友人関係の中で育ちが促されたと感じた理由」では日常場面との比較を表す「日々」「会話」「お互い」、保育参観の「子どもの個性の違いを感じた理由」では個人差を表す「返事」「体」、「友人関係中での育ちが促されたと感じた理由」では性別・きょうだい共に現状との比較を表す「少ない」が共起ネットワークの中心的な語として登場して全体が構成されていた。

今回の保育参加で取り扱った活動は男児が得意とするものや女児が得意とするものが含まれていた可能性は否めず、少なからその点が“学年差”“個人差”を表わす中心語の登場に影響を与えていたと推察される。また、一方で、同年代の中で活動を捉えていた保護者と、近くで活動をしていた上・下位年齢の子どもとの比較の中で捉えていた保護者の存在もあったものと考えられる。これらの点は保育参加及び保育参観、ひいては日常の自由遊び等の場面において保護者を異年齢間での活動場面に招く際に考慮すべき点として保育者が意識しなければならない留意事項となるものである。

## 研究 2

### 目 的

研究1において、保育参加及び保育参観では、年齢という因子よりも性差及びきょうだいの有無による違いが保護者の気付きに影響を与えていることが示唆された。また、保育参加及び保育参観の回答を同じ調査対象者に求めることで、両活動から捉えた気付きの特長を見出した。

研究2では、両活動の調査対象者を同一にすることによる回答の類似を避けるために、異なる幼稚園で実施された保育参加と保育参観に出席した保護者の気付きに着目し、そこから見出されるキーワードを基に両活動から得られる気付きの類似性について検討することを目的とした。

### 方 法

#### 〔調査時期〕

保育参加は2014年10月14日～10月16日、保育参観は同年6月10日～6月12日の期間中に各学年それぞれ1回実施し、無記名式の質問紙を保育参加及び保育参観の活動後（最終日）に配布した。両幼稚園で行った活動の内容は表3の通りである。

#### 〔調査対象者〕

調査対象は、研究1で得られた“年齢”因子による影響が少ないという点を手掛かりに対象者を同一学年のクラスに限定し、N県M市の私立幼稚園Xで実施された保育参加、及び同県I市のZ幼稚園で実施された保育参観の活動に出席した年少クラス（3～4歳）の保護者を調査対象とした。回収した用紙中の欠損項目等を考慮した結果、X幼稚園55名分、Z幼稚園38名分を有効回答とした。

#### 〔調査手続き（倫理的配慮を含む）〕

各回ともに、当該クラスの教諭が保護者に調査用紙を配布し、調査の概要、目的、不利益の発生防止、個人情報保護の具体的な手順・責任の所在に関する説明を口頭にて行い、回答を依頼した。調査は無記名式で実施し、調査用紙の提出をもって研究参加に同意を得られたことを説明した上で後日登園時等に回収した。また、回収時に回答内容が見えないように保護者には封筒を配布し、回収期限後に一斉に開封することで匿名性を確保した。

#### 〔調査項目〕

分析に用いた調査項目は、①基本属性（性別、子どもの年齢、きょうだいの有無）、②活動に伴う気付き（「子どもの個性の違いを感じた場面」「育ち合いの姿が見られた場面」「友人関係中で育ちが促されたと感じた場面」）の有無、そう感じた理由（以下、自由記述）である。

量的データは表計算ソフトExcelを用いてデータをセットし、Statcel3を使用して集計を行った。自由記述データの分析には、計量テキスト分析システムKH Coder Ver. 2.00fを使用した。分析に用いたKH Coderの品詞体系は、名詞（漢字を含む2文字以上の語）、名詞B（平仮名のみ語）、名詞C（漢字の語）、サ変名詞、形容詞、形容動詞、ナイ形容、副詞可能、未知語、動詞（漢字を含む語）、動詞B（平仮名のみ語）、否定助動詞、形容詞、形容詞B、副詞、副詞Bである。また、特徴が見られた集合体に対しては関連語検索を行い、共起ネットワーク（出現パターンの似通った共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク）を描いて中心語と他の語との結びつきを捉えた。

### 結果及び考察

#### 1. 保育参加・保育参観に関する結果

X幼稚園及びZ幼稚園（以下、X群、Z群、併せて両群）での活動に参加した保護者の回答を分析した結果、表4に示すように、【質問】「子どもの個性に気付けた場面があった」、「育ち合いの姿が見られた場面があった」、「友人関係中での育ちが促されたと感じた場面があった」の各群間に有意な差は認め

表3 X・Z幼稚園における保育参加及び保育参観の時期・内容

X幼稚園	保育参加	10月14日	リズム遊び	10月15日	泥団子・砂遊び	10月16日	散歩
Z幼稚園	保育参観	6月10, 11, 12日		絵具を使った制作・ゲーム等			

表4 保育参加及び保育参観における気づき

	子どもの個性に気付けた		育ち合いの姿が見られた		友人関係中での育ちの促し	
	肯定回答群	p値	肯定回答群	p値	肯定回答群	p値
X幼稚園(群)	55 (87.3)	n.s.	41 (74.5)	n.s.	41 (74.5)	n.s.
Z幼稚園(群)	37 (97.4)		25 (65.8)		25 (65.8)	

n (%), n.s.: not significant, \*: p<0.05

図5 X幼稚園 (子どもの個性)

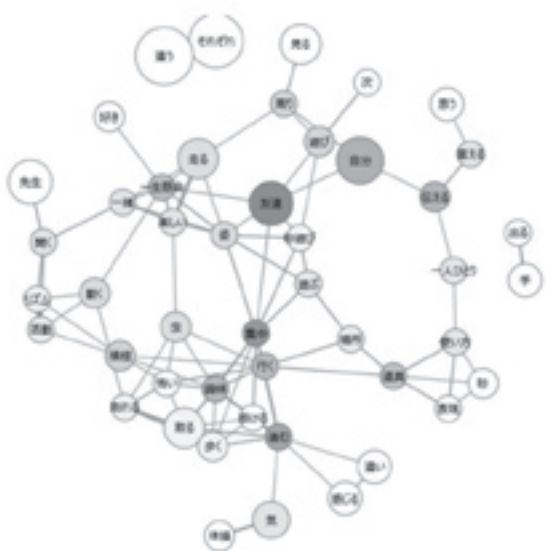


図6 Z幼稚園 (子どもの個性)

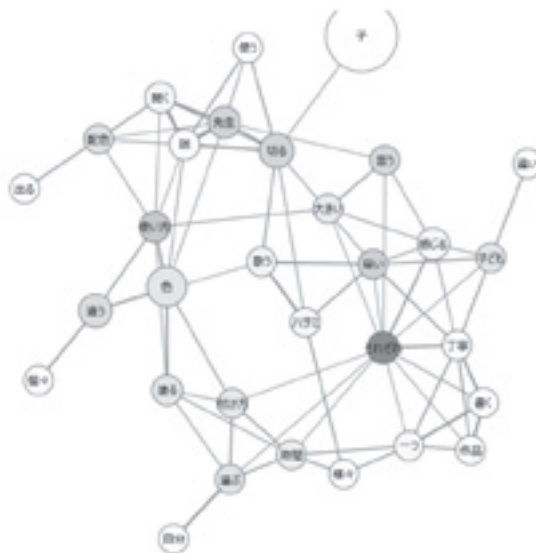


図7 X幼稚園 (育ち合い)

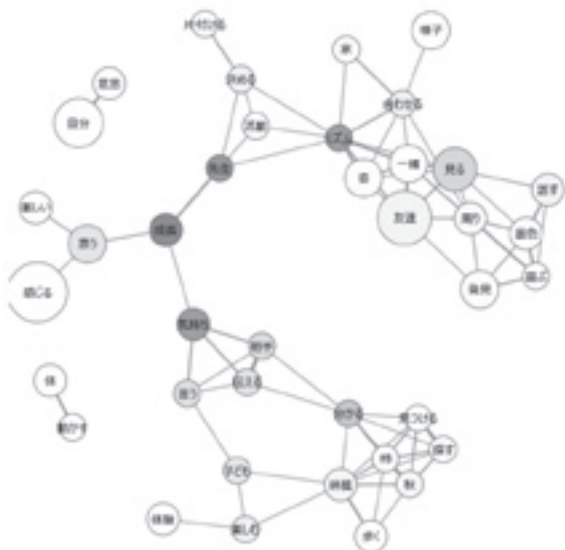
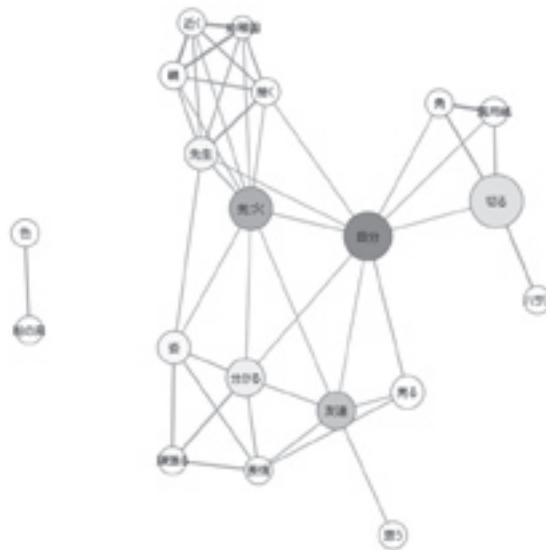


図8 Z幼稚園 (育ち合い)





次に、異なる幼稚園で行われた保育参加と保育参観の保護者の気付きに着目し、そこから見出されるキーワード（中心語）から、両者の活動から得られる気付きの類似性について検討することを目的とした。その結果、保育参加と保育参観の回答において出現した語自体は異なっても、原文の意味内容からその語を紐解くと、両活動における気付きは類似性が高く同質性を確認できた。

そもそも、保護者が保育所ではなく幼稚園を選択した理由としては、遊びの多さや雰囲気、保育内容の充実等、園の教育方針や教育内容を吟味した園選びの傾向が強いこと<sup>9)</sup>が背景にあるという。このような保護者の視点に立てば、幼稚園選びの理由の大きな要因に“遊び”があることは明らかである。そのなかにあって、松本ら（2015）の研究が指摘するように、子どもの遊びやスリル、リスクに関する考え方には、実際の子どもの姿に保護者が触れることがもっとも影響力を与えることが示唆されている<sup>10)</sup>ように、幼稚園での保育活動（遊び）に保護者が参加することで、保育自体への意識が養われる部分は多くあるものと思われる。これらの示唆に本研究の結果を踏まえて考えれば、保育参加及び保育参観を企画する際には、「保護者にどのような気付きを求めるのか」という視点を起点に、研究1に示したような年齢差及びきょうだいの有無による違いを考慮しながら、どのような活動を計画すれば、保護者に適切かつ効果的に気付きを得てもらえるのかを検討していく必要がある。そして、保育参観においても保育参加と同様に友人関係間での育ち合いの姿を感じ取ることができるという結果は、“きょうだい”がいる家庭内での子ども関係が少なくなった昨今において、親子が楽しめる参加型の活動に特化しがちな現在の保育・教育現場に一石を投じる指摘になるのではないだろうか。

また、現実的な課題として、幼稚園の人的・環境的な都合から保育参加を実施することが難しいケースも考えられる。一見、保育参加と比べて保育参観は視覚的に捉えることが主になるため、その効果が未知数な活動と捉えられがちである。しかし、研究2から産出された両者の効果の類似性を根拠として、保育参加及び保育参観のいずれの活動からも一定範囲（量）の保護者の気付きを生むことができると仮定すれば、これらの課題には十分に対応が可能であると考えられる。そして、本研究の結果に示された着眼点等を頼りに保育者が意図的な働きかけを行えば、より効果的な活動になるものと考えられる。

しかし、保育参加・保育参観が持つのは利点ばかりではない。直接的であるにしろ間接的にしろ、保護者が保育活動に関与するということは、保護者に

とっては自分の子どもと他人の子どもを比較することで劣等感を抱いたり、他の子どもとの比較で優劣をつけかねない危険も孕んでいる。その意味において、保育参観及び保育参加の展開時には“保護者への配慮”という面にも留意しながら活動を行っていく必要がある。

最後に、本研究では全体像を捉えながらも、それぞれの群での活動内容は実施の都合・性質上、統一することが難しく、本文中でも触れたように特に活動内容によっては性差の項目において影響を与えた可能性は排除しきれない。

加えて、今回取り上げた2つの調査結果は保育参加及び保育参観での保護者の気付きの大枠を捉えたに過ぎず、さまざまな条件下で行われる両活動の部分的な調査分析・考察となった感は否めない。この点については、本研究の限界点及び課題である。

謝辞：本研究は、信州幼児教育研究会 第2分科会「家庭・地域との連携」における研究の成果を発展させたものである。研究にご協力いただいた幼稚園を利用されている保護者及び園児、並びに各園の先生方に心より感謝申し上げます。

#### 注

(1) CiNii (NII 学術情報ナビゲータ) を用いた検索において、「論文検索」—「保育参観」のキーワードにおいて該当するのは6件である。このうち4件は諸外国の報告、雑誌特集、小学校との連携など、直接的な幼稚園における保護者支援としての意味合いを持つ研究以外の内容である。なお、「論文検索」—「保育参加」のキーワードにおいて該当するのは51件（教育実習等における保育参加を含む総数）である点から単純比較すれば、着目されにくかった何らかの要因が存在するものと推察される（検索日：2016年3月7日）。

(2) 本研究の調査に先立ち行った予備調査において、保育参加及び保育参観の感想の中から得られた自由記述文を、高等教育機関所属の研究者3名と主任以上2名を含む幼稚園教諭4名の計7名でグルーピングを行い、「子どもの個性の違い」「育ち合いの姿」「友人関係の中で育ち」の各キーワードを抽出した。

(3) 樋口（2014）によれば、KH Coder は茶笥 (IPADIC) の形態素解析の結果をほぼそのまま用いているために品詞体系も準じているが、分析時の利便性のために変更と簡略化がなされている<sup>11)</sup>。



## 出典

- 1) 長谷川孝子「保護者の保育参加導入に関する保育者の意識についての研究」『清泉女学院短期大学研究紀要』(33), 2014年 p9.
- 2) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2008年 p57.
- 3) 同前書 p201.
- 4) 同前書 p183.
- 5) 文部科学省初等中等教育局幼児教育課「平成26年度幼児教育実態調査」2015年 p20.
- 6) 大森洋子・友定啓子・清水智子ほか「幼稚園における保護者サポートシステムの研究(3)」『山口大学学部・附属教育実践研究紀要』(4), 2004年 pp173-189.
- 7) 島津礼子「幼稚園の『保育参加』における学びの生成について」『保育学研究』52(3), 2014年 pp42-43.
- 8) 高原砂夜子「保育所と家庭の連携を探る——保育行事を通して親の保育参観を考える」『日本保育学会大会研究論文集』(48), 1995年 p61.
- 9) 住田正樹・山瀬範子・片桐真弓「保護者の保育ニーズに関する研究——選択される幼児教育・保育」『放送大学研究年報』30, 2013年 p27.
- 10) 松本信吾・杉村伸一郎・中坪史典ほか「遊びのリスクに対する幼稚園保護者の認識の変容要因」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』(43), 2015年 p41.
- 11) 樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して」ナカニシヤ出版, 2014年 p9.